

主要詩集紹介

1990年以降に出版された、『アヴェルノ』以外の主要な詩集について紹介する。ただし、詩集の要約は当然ながら書き手の主観に左右される。以下はあくまでひとつの試みである。

第五詩集『アララト』(Ararat, 1990)

母と娘の関係を中心に家族・親戚を主題化した自伝的な作品。夫を亡くしたばかりの老いた母親と、すでに母となった二人の娘（話者と妹）が登場する現在の「語り」に、幼年期の回想が織り込まれる。過去の母親の子育てのやり方が焦点化されるが、その背後には夭折した長子（長女）の影が揺曳する。母親および家族の関係（ファミリー・ロマンス）を観察する話者（娘）の眼は、精神分析医のそれである。あまりに自伝的に見えることを怖れてか、途中に挿入されたメタ・ポエム「信頼できない話者」(“The Untrustworthy Speaker”)は多分に自己韜晦的である。出版三十年後の時点から読むと、後年の、葛藤の神話化・寓話化の予兆を看取できる詩もある(“Lost Love”, “A Fable”など)。前衛性・尖鋭性を期待した一部の読者には不評だったようだが、作者にとっては今でも愛着がある作品らしい。ロバート・ロウエルやシルヴィア・プラスの、いわゆる告白詩を好む読者には近づきやすい。なお、表題は、ニューヨーク近郊にあるグリュック家の墓所の名に由来する。

第六詩集『ワイルド・アイリス』(The Wild Iris, 1992)

ピューリッツァー賞受賞。詩人のほかに、植物が話者となるという奇抜な趣向で世を驚かせた。神が話者となる詩篇もある(“Early Darkness”, “Harvest”)。舞台は、夏の短いヴァーモント州。苦難という冥府(母なる大地がもたらした抑鬱状態)を抜け出した詩人は、春の花園で再び生の喜びに浴する。花園はエデンの園を暗示する。詩人はペルセポネでもあり、イヴでもある。雑草や自生する花を含む種々の植物が話者となり、ガーデニングに勤しむ詩人と夫(アダム。「ジョン」と呼ばれる)を超然と観察する。人間の苦難、愚かしさ、そして魂(soul)の問題が、植物の観点から眺められる。意味深いことに、頭脳(mind)を持たない植物の方が、魂の本質に通じている。なかには「デイジー」のように、詩人の内面を代弁してくれる心優しい植物もいる。詩集は、秋の詩群で閉じられる。かつて子離れできない母親のために苦しんだ娘は、今や息子の母として子離れの決意をする(“Retreating Light”)。

第七詩集『メドウランズ(湿地帯)』(Meadowlands, 1996)

物心両面ですれ違い始めた倦怠期の夫婦(ジョンと詩人)の声と、『オデュッセイア』の主人公夫婦であるオデュッセウスとペネロペの声が交錯する(古代と現代の交錯)。二組の声が重なり合うことは少ない。むしろ、それぞれが相互に対照される。現在の夫婦の会話は、互いの性格や日常の些事にまつわるものが多い。読む者には自伝的に見える。神話版の方にはキルケも登場するが、父と母の関係を距離を置いて眺めるテレマコスをもう一人の

話者として導入することで、この詩集は平板化を免れている。作者（正確には、いわゆる「想定される作者」）が、ペネロペよりもテレマコスに感情移入しているゆえだろう。対話形式の詩篇もあるが、ほとんどが独白形式。妻である詩人は、トロイのイタカ兵とオデュッセウス（妻と家庭から自由になった男たち）にも想いをめぐらす。詩人が自分自身に語りかける内省的な詩篇もある（“Rainy Morning”, “Midnight”）。内容的に機能不明な謎めいた詩も散見する。表題の「メドウランズ」は、かつて湿地だらけだったニュージャージー州東端部を指す。

第八詩集『**新生**』（*Vita Nova*, 1999）

長い苦難（抑鬱状態、冥界）が終わり、話者である詩人に、ようやく春（新生、再生、別世界での目覚め）が訪れる。この点で『ワイルド・アイリス』の冒頭に似ている。精神的新生の体験はまた、オルフェウスとエウリディケを話者としても暗示的に語られるが、作者は、冥界に留まり続ける妻だけでなく、地上に戻る夫（詩人の元型）の方にも自己投影しているようだ。というのは、英語の表題詩“The New Life”が新生にともなう罪悪感（克服不能な哀しみ）に言及しているのだが、これはオルフェウスの経験でもあるからだ。カルタゴ女王ディドーの絶望とアエネアスの冥界からの帰還も、この詩の主題に神話の枠組みを与えている（“The Queen of Carthage”, “The Golden Bough”）。後の『アヴェルノ』で縦横に展開されるデメテル・ペルセポネ神話を想起させる詩篇もある（“Timor Mortis”）。巻頭に置かれた表題詩“Vita Nova”、それと姉妹篇を成す巻末から四番目の“Seizure”、その直前の精神分析療法を暗示する対話詩“Inferno”、そして巻末に置かれた二つ目の表題詩“Vita Nova”（あからさまに自伝的）が、この詩集の骨格と言えるかもしれない。集中には明らかにエミリ・ディキンソンのスタイルを意識した作品が収められている（“The Garment”, “Immortal Love”, “Earthly Love”）。

第九詩集『**七つの時代**』（*The Seven Ages*, 2001）

得意の連作詩集とは異なり、統一的なテーマはないが、相変わらず家族や友人を扱った詩、少女時代の回想や夢を主題とする内省的な詩が多い。グリュックには珍しく、若き日の情熱的な恋を含む、恋（エロス）を主題化した詩も何篇かある。少女時代や妹と過ごした夏を回想する一連の詩は、ごく素直に自伝的なものに見える（“Study of My Sister”とそれに続く数篇）。母親も登場するが脇役に過ぎない。旧友との再会を主題とした“Reunion”、少女時代の自画像を描く“Birthday”、旧友との文通をめぐる“From a Journal”など、精神的成熟を主題とする優れた詩が目玉を引く。皮肉交じりのユーモアに満ちた“Ancient Text”も稀少な作品。全体として、詩人の人間的成熟を示している。

第十詩集『**アヴェルノ**』（*Averno*, 2006）本訳書。

第十一詩集『村の生活』(A Village Life, 2009)

詩集の性格はグリュック作品中できわだって異色。短編小説集に近い。アメリカの田舎(おそらく、当時住んでいたヴァーモント州の村がモデル)に住む人々を取り上げている。多数の名もない村人が三人称で登場する。たいていが退屈な田舎の生活に倦んでいる。一人称の話者もその多くが村人であり、しかも詩篇ごとに変わる。若干の詩篇の話者は作者と想定できる。随所にニューイングランドの自然描写がちりばめられる。村の風俗・風物、若者たちのグループ恋愛、森の中での逢引き等も描かれる。目を引く村人を挙げれば、相手に合わせて自在に自分を変え、人妻に取り入っては不倫を繰り返す若い男(“In the Café”)、年を取って男が振り向かなくなり、夜の散歩が習い性となった孤独な女(“Walking at Night”)、殺風景な自分の部屋を嫌い、夜は村のバーでテレビを見て過ごす女子工員(“Via delle Ombre”)、村の生活を厭い、映画で一度見ただけの海辺に住みたいと空しく願う主婦(“March”)、いちじく泥棒を神父に告白しても、けっして懲りない少年(“Confession”)等々。ニューイングランドの田園詩人ロバート・フロスト(Robert Frost)とシャーウッド・アンダスン(Sherwood Anderson)の連作短篇集『オハイオ州ワイズバーグ』(*Winesburg, Ohio*, 1919)を想起させる。グリュック作品中で一番幅広い読者層にアピールする詩集かもしれない。

第十二詩集『しとやかで貞淑な夜』(Faithful and Virtuous Night, 2014)

全米図書賞を受賞。息の長い詩行および散文詩を試みている。夢の論理に従うかのような幻想的な詩が多い。自己言及的なメタポエティックな詩行も多い。沈黙、死、そして老いが主題化されるが、それらが作者の沈黙、死、老いであるか否かは不明。というのも一人称の話者“I”が曲者だからだ。四番目に置かれた長篇の表題詩「しとやかで貞淑な夜」を、読者は、少女期の自伝的回想かと思いつつ読み始めるが、すぐに話者には「兄」がいて、しかも伯(叔)母が同居していることが判明する。話者が作者グリュックだという読者の思い込みは裏切られる。その兄が読んでいる内容不明の物語のタイトルが、アナクロな「しとやかで貞淑な夜」なのだ。きわめつけは、末尾に「そして時は過ぎた。わたしは／兄のような少年になり、それから／男になった」(“And so time passed: I became / a boy like my brother, later / a man”)とあり、その後にメタポエティックな言い訳という「落ち」まで付いてくる。シュールでポストモダンな夢幻詩というよりは、抒情詩を作者の自伝としてしか読もうとしない読者に対する、グリュックの人を喰った逆襲であろう。さらに“Cornwall”では、同一人物と思われる話者が英国コーンウォールに田舎家を借りているイギリス人画家であることが分かり、“The White Series”では、その「わたし」がアメリカ(モンタナ州)に移住した兄の後を追う、というのだから念が入っている。しかし、率直に言えば、この種の詩は最上のグリュックの詩と比べて、抒情性と暗示性をやや欠いている。ジェンダーのトリックは“Midnight”や散文詩“A Foreshortened Journey”でも使われる。“Approach of the Horizon”の「わたし」は、死にゆく性別不明の画家である。グリュックの一人称は変幻自在で、まった

く油断がならない。

一方、表題詩と同じトーンの“Visitors from Abroad”では、夭折した姉に言及して、「わたしはいつもあなたについて書いている、とわたしは声に出して言った、／わたしが〈わたし〉と言うとき、それは常にあなたのことなのです」(“I write about you all the time, I said aloud, / Every time I say ”I,“ it refers to you.”)と告白する。これは、グリュックを読んできた者には、読者を煙に巻く自己韜晦とは、とうてい思えない。また、この詩集を締め括るのはたった十行の散文詩(“The Couple in the Park”)だが、その直前の“A Summer Garden”は母の死を取り上げた長篇である(といっても七頁)。集中、きわだって優れた作品に見える。締め括りにふさわしい。父の死に向き合った初期の“Metamorphosis”(*The Triumph of Achilles* [1985])と同じく、率直な自伝詩に思える(思いたい)が、読む者にはもはや確たる自信が持てない。おそらくは、自伝とフィクションの二項対立を止揚する読み方が求められているのだろうが、筆者としては、この詩の卓越性を判断のより所としたい。